

Sprague, Joey, 2016, "How Feminist Count: Critical Strategies for Quantitative Methods," *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences Second Edition*, Rowman & Littlefield Publishers, 95-143.

ジョーイ・スプラグ, 2016, 「フェミニストはいかに数えるのか——定量的手法のための批判的戦略」

※ () の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

レジュメ作成者による紹介文

本稿の著者である Joey Sprague (カンザス大学教授) は、フェミニスト方法論における著名な研究者の 1 人である。本稿は、フェミニスト方法論の入門書として名高い *Feminist Methodologies for Critical Researchers: Bridging Differences* の第 2 版に収録されている。本稿では、定量的研究の課題が整理されたのち、フェミニスト研究者たちがいかにそれらの課題に対処してきたのかについて説明がなされている。

1. 導入 (95-96)

- 定量的な手法で行われる研究は手順が標準化されているため、その知見の信頼性は高い。
 - ・ しかし多くの研究者たちは、定量的研究における標準化の強調を批判的に捉えている。そして残念なことに、その批判の多くは、定量的なデータ収集や分析のための方法論に対する全面的な拒絶へと横滑りしてしまっている。
- フェミニスト研究者たちは、自らの研究において定量的手法を使用することができないと仮定する傾向があったため、主流の定量的方法論に対する批判的分析は多くなされてこなかった。
 - ・ さらに、定量的調査を実施する際のフェミニスト的な手法について論じた研究は、事実上皆無に等しい。
- 本稿ではまず、これまでフェミニストが提起した定量的手法に対する数少ない批評を検討する。その後、フェミニストの定量的研究者が実施している戦略について考察する。

2. 標準的な定量的方法論の問題点 (96-114)

- 定量的方法論は、尺度の標準化と、データの収集・分析過程における研究者によるコントロールを重視してきた。なぜならこれらの条件は、因果関係に関する主張の厳密さにとって重要であるため。
 - ・ 因果関係について説得的な議論を行うには、最低限つぎの 3 つの条件を満たす必要がある。(1)「原因」と「結果」が共起することを立証すること、(2)「原因」が「結果」に先行することを示すこと、(3)「原因」と「結果」が共起する理由に関して他のすべての妥当な説明を排除すること (Cook and Campbell 1979)。

- とくに実験室で行われる研究は、因果関係に関する仮説を検証するために設計されているため、内的妥当性が高い¹。
 - 一方でフェミニストたちは、実験室での研究結果がどの程度一般化可能なのかについて疑問を呈している。
 - すなわち、現実の人々の実践や信念は、権力関係が飽和している文脈の中で構築されているのにも関わらず、実験室での研究はこうした権力関係を「白紙化」し、「非文脈化」された分析を作り出すにすぎないと、フェミニストたちは主張するのだ (Fine and Merle Gordon 1989; Sherif 1979)。
 - 以下、10 の事例を用いながら定量的方法論の問題点を指摘する。

(1)標準化された尺度に潜むバイアス (97-98)

- 標準化された尺度は、大規模調査の際に有用である。
 - 例えば、ある尺度を繰り返し使用することで、経年変化に関する研究が可能となる。
- 一方で標準化された尺度は、限定的な可視化のパターンを生み出す。
 - つまり、ある現象のある側面を可視化する一方で、他の側面を隠してしまう。
 - 尺度は常に特定の歴史的・政治的文脈の中で構築される。すなわち、定量的研究者は、質問や選択肢をどのように設定するのかによって、結果をコントロールすることができる。

(2)人を数える (98-100)

- 1790 年にアメリカで実施された第 1 回国勢調査では、家族の「長」を特定し、16 歳以上の白人男性市民、16 歳未満の白人男性市民、白人女性市民、その他すべての市民、奴隷というカテゴリーで人数を数えた。
 - 一家の長は男性であり、名前を持ち、それ以外の人々は彼との関係によってのみ識別された。
 - 16 歳以上の白人男性市民は、女性や奴隷にはない経済的・軍事的な役割を有すると見なされたため、年齢での分類が行われた。
 - 奴隷の性別は、1820 年まで記録されなかった (Gauthier 2002)。

¹ ここでの内的妥当性とは、あるリサーチ・デザインが、明確な結論を導ける程度のことを指す。例えば、「x が y を引き起こす」という因果関係を明らかにしようとする研究であれば、その関係を論理的に説明する一方で、他の形で説明できる可能性 (y は x ではなく z など他の要因によって引き起こされているという可能性) を小さくすることで、明確な結論、すなわち高い内的妥当性をもたらすことができる。実験では、x の介入が y に先行することを示しやすいため、高い内的妥当性をもたらされる (野村 2017: 92)。

- 国勢調査において、女性の有給労働は過小評価されてきた。
 - ・ 職業分類に使われるコーディングは歴史的に、上流階級や中流階級以上の男性が行う仕事（専門職や管理職）を、女性が担う仕事（秘書やサービス業）よりも細かく区別してきた。

(3)犯罪者の特定 (100)

- Khalil Gibran Muhammad (2010) は、米国の国勢調査における囚人の分類が、犯罪者としての黒人イメージを作り上げたことを指摘している。
 - ・ 1890 年までの国勢調査は、刑務所にいる人々の人口を民族別（例：アイルランド人、ポーランド人、イタリア人）に分類していた。
 - ・ しかし 1890 年以降、民族の識別は行われなくなり、受刑者は黒人または白人として識別されるようになった。
 - ・ Muhammad によると、この変更が、「黒人は危険な集団であるという国民的な議論」(2010: 3) を引き起こした。

(4)仕事の分類 (100-101)

- 米国の国勢調査のみならず、雇用主が仕事を評価するために用いられる最も一般的なシステムである Hay Guide Chart-Profile method もまた、特権的な男性の立場から仕事を分類している (Steinberg 1995)²。
 - ・ Ronnie Steinberg (1995) が示すように、この手法は顧客志向のスキルを軽視している。

(5)ドメスティック・バイオレンスの測定 (101-102)

- 特権的な男性の立場から作られた尺度のもう 1 つの例は、ドメスティック・バイオレンスへの関与に関する一般的な尺度、Conflict Tactics Scale (CTS) である。
 - ・ 1979 年に開発されたオリジナル版は、一連の暴力行為（例：殴る、平手打ち、揺さぶる、ひっかく、蹴る）を列挙し、過去 1 年間にパートナーに対してこれらを行った頻度を尋ねるものである。
- Michael Flood (1999) は、フェミニスト的観点から、CTS の問題点を以下のように指摘する。
 - ・ 第 1 に、男性よりも女性に対して頻繁に振るわれる暴力の形態、例えば性的暴行、窒息、付きまとい行為が除外されている。

² Hay Guide Chart-Profile method の詳細については、下記の資料を参照されたい。
<https://professionals.lincolnshire.gov.uk/downloads/file/576/hay-group-je-method>

- ・ 第2に、自己報告式であるCTSは、暴力の最も極端な形態である夫婦間の殺人を数えることができない。
 - ・ 第3に、CTSはパートナー間の行動について質問するので、この手法では、カップルが別れた後に行われる暴力を捉えることができない。女性が経験する暴力のうちの約75%は、別れた後に発生する。
 - ・ 第4に、女性は男性よりも自分自身の暴力行為を報告する傾向が高いことが調査で示されている。
 - ・ 最後に、この尺度は、暴力行為が攻撃的であるのか、自衛的であるか、傷害に至ったかなどについては無視している。
- 改訂版CTS (Straus et al. 1996) は、性的強制や暴力行為による傷害の程度を測定する尺度を追加することによって、Floodによる批判のいくつかに対応している。
 - ・ しかし改訂版CTSにおいても、女性が置かれている最も深刻な状況、すなわち、男性が経済的支配と暗黙の脅しによって女性を支配する家庭内の従属体制を十分に明らかにすることはできない (Flood 1999; McCarry, Hester, and Donovan 2008; Smith 1994)。

(6)特性の測定 (102-103)

- 標準化された尺度において、特性[traits] (=パーソナリティ) は、文脈に関係なく測定できるものとして捉えられる。
 - ・ この考え方は、西洋文化において支配的である「自己は一元的で、あらゆる状況において一貫しているもの」という概念を前提としている。
 - ・ しかし、この仮定は必ずしもデータによって裏付けられてはいない。Hazel Markus and Shinobu Kitayama (1998) は、多くのアジア、アフリカ、そして一部のラテンアメリカの文化において、自己は社会的文脈に依存するものであると論じている。
 - ◇ たとえば、多くのアジア人は、家族と一緒にいるか、仕事の文脈に置かれているかによって、自己の理解の仕方が変化する (Markus and Kitayama 1998)。
 - ・ 人種的・民族的アイデンティティも同様に状況によって変化する。
 - ◇ Kerry Ann Rockquemore と David Brunsma (2008) によると、ミックス・ルーツを有する人が白人の多いリベラルアーツスクールに出願する際、入学のチャンスや人種特有の資金調達の高めるために黒人であることを選択する場合もあれば、歴史的に黒人の多い大学に入学しようとする際、同様の理由で白人であることを表明する場合もある。

(7) サンプル (104-107)

- サンプルの代表性[representativeness]を高めることは、定量的研究にとって重要である。
 - ・ 定量的手法を用いる研究者たちは、研究に無関係だと思われる被験者の特性が研究結果に影響を与えないようにするために、均質なサンプルを求めてきた。その結果、「正常な」被験者として選ばれてきたのは白人男性であった (Bird and Sharman 2014; Johnson et al. 2014)。
- 一方で、サンプルの偏りを適切に把握することによって、定量的研究の潜在的な強みを発揮することができる。
 - ・ 定量的研究は、ある特定の場所に住む人々、特定の職業の人々など、サンプルを限定して分析を行うことが可能である。

(8) 分析のレベル (107-109)

- 定量的研究に対するフェミニストの批評は、分析のレベルについても疑義を呈する。
- 比較的最近までジェンダーや人種に関連する定量的研究は、個人レベルの分析に依存していた。
 - ・ 個人レベルのデータは、個人レベルの説明しか生み出さない。例えば、労働に関する不平等について研究する際に、労働者の特性 (=パーソナリティ) を調べるだけであれば、彼らの特性が不平等という結果とどの程度関係しているかを推測することはできるが、不平等が生じる過程やそのメカニズムを明らかにすることはできない。
 - ・ 個人レベルの分析を超えて、社会的な不平等の原因について推論するには、労働者たちの動機 (労働者が価値の低い仕事を選んだ理由など) や、雇用主の偏見についての仮説を立て、分析に組み込む必要がある。

(9) 統計的な分析 (109-110)

- 統計学は、データを分析するための現代的なアプローチとして普及しているが、特定の歴史的な文脈の中で発展してきたものである。
 - ・ Donna Hughes (1995) が指摘するように、最初の統計的手法を発明した人々は、知能における人種差を見出すために統計を使っていた。
 - ・ 積率相関、二乗統計量、重相関・回帰の開発に大きく貢献した Karl Pearson は、兄弟姉妹間の身体的特徴 (目や髪の色、頭の長さ) と精神的特徴 (自己主張、内観、知能) に関する相関を計算し、男女の差異が遺伝によるものであると結論づけた。

- もちろん、一般的に使用されている統計的手法の開発者が人種差別的、性差別的な動機を持っていたという事実は、統計解析が本質的に人種差別的、性差別的であることを意味するものではない。
 - しかし、たとえば統計的有意性の検定は、差異を極端に強調させ、根底にある連続性を見えなくさせることがある。
 - このような定量的研究における些細な違いを誇張する傾向は、その差異が女性と男性の間や、異なる人種・民族の間に存在する場合に特によく見られる (Eichler 1988; Hyde 2005; Williams 1991)。

(10) テクニックに対する偏愛的態度[fetishization of technique] (110-114)

- 1996年にアメリカ心理学会 (APA) は、複雑な統計解析に対する、研究者たちの偏愛的な態度に関して懸念を表明している。
- 定量的社会学者は、よりシンプルなツールで説明できるのにも関わらず、なぜ高度に専門的な統計を好むのだろうか。
 - R. W. Connell (1995)によると、中産階級の男性性の形態は、権力を正当化するために技術的合理性と専門性に大きく依存している。つまり、経済的に恵まれた男性は、技術的な熟練によって自らの男らしさを証明する。
 - 研究の評価において不必要に高いレベルの技術的複雑性を強調することは、定量的社会学者が特定の形態の男性性を支える基準を堅持していることを示唆している。

3. フェミニストは定量的手法をどのように使うか (114-140)

- 定量的方法論にフェミニストの立場からアプローチする議論は稀であるが、定量的手法を用いるフェミニスト的研究は多く存在する。
- フェミニストたちは、定量的手法をどのように使っているのだろうか。著者は、定量的研究をおこなっている著名なフェミニストたちに、自身の研究を含め、お気に入りの論文を挙げてもらうよう依頼した。
 - 以下、5つの例を紹介する。

(1)保守的な家族政策は結婚に有利か? (115-117)

- 異性婚を重視する保守的なプロテスタントの離婚率は低いことが予想される。しかし、この種の住人の割合が多い州の離婚率は、実は他の州より高い。Jennifer Glass と Philip Levchak (2014) は、このパラドクスに挑んだ。
 - 彼女たちは、国勢調査データ、裁判記録、郡ごとの宗教宗派の人口データを用いて、アメリカ合衆国の3143郡のうち3123郡に関するデータファイルを作成した。この郡レベルのデータを、National Survey of Family Growth (1995年および2002年)の結婚経験者のデータと統合させた。そして多階層分析により、個々の家族構成と、その家族構成がどのように変化しているのかを調べた。

- ・ 分析の結果、保守的なプロテスタントが結婚以外の性的禁欲を擁護し、性教育、避妊、中絶に反対することは、結婚・出産の若年化および教育水準の低下につながり、その結果、家庭における経済的ストレスが増大するという形で、離婚率に大きな影響を及ぼすことが明らかにされた。

(2)女性の美しさと男性の地位は交換されるのか？ (117-118)

- ・ 社会生物学者を中心に、女性の身体的魅力と男性の高い社会的地位との交換によって異性間関係が形成されると主張する論者が存在する。
 - ・ しかし、Elizabeth McClintock (2014) は、美[beauty]と地位の交換という仮説は、女性と男性のパートナーが学歴、人種、宗教、年齢などの社会的属性において同質あるいは類似的であることを実証した多くの研究結果に反すると主張する。
- ・ では、美と地位の交換という考えを支持するよう見える調査結果は、どのように説明されるのだろうか。
 - ・ McClintock は、パートナー同士の地位と魅力[attractiveness]は同等であるという研究結果を踏まえ、美と地位の交換仮説は、男性の美しさと女性の地位の高さを無視した結果であるという仮説を立てた。
 - ・ この仮説を検証するために、彼女は National Longitudinal Study of Adolescent Health (2001-2002 年) のデータを使用した。このデータには、異性愛者のカップル 1507 組のパートナーの魅力と地位に関する情報が含まれており、面接者は、回答者の身体的魅力、身だしなみ、性格をそれぞれ 1～5 で評価した。
 - ・ McClintock の分析戦略は、パートナー同士の特性を比較し、地位や魅力が一致しない人々の中からその交換を示す証拠を探すというものであった。
 - ・ McClintock は、地位と魅力がどの程度一致しているか、魅力と地位が同一人物の中でどの程度相関しているかという尺度を方程式に加え、男女別にモデルを当てはめてみた。これらの式では、身体的魅力と地位の交換を示す証拠はほとんど消滅している。
 - ・ 分析の結果、身体的魅力の高い個人は、高い社会経済的地位にいる傾向があることと、個人の特性 (=身体的魅力と社会経済的地位の高さ) は、パートナーの特性と相関関係にあることが示された。すなわち、「美と地位の交換」仮説ではなく、「美と地位の一致」仮説が支持された。
 - ・ 彼女の研究は、ジェンダーに基づく先入観がいかに関係を形成し、さらには調査結果を歪めてきたのかを示している。

(3)差別はどこで生じるのか? (118-120)

- 1964年に制定された米国公民権法は、人種や性別による差別を禁止した。
 - この法律がもたらした結果について、世間では2つの説が流通した。ひとつは、この法律が「逆差別」を引き起こしているという説であり³、もうひとつは、職場における性差別や人種差別はもはや問題ではなくなったという説である。
 - Stainback と Tomaskovic-Devey (2012) は、1966年から2005年の約50年間ににおける人種差別撤廃のパターンを追跡した。彼らの分析戦略は、以下の2段階に分けられる。まず、産業の盛衰、職場の規模、組織の種類(本社と支店など)を考慮しながら、全国レベルの不平等を経時的に追跡した。つぎに、特定の産業、地理的な場所、組織で構成される「ローカルな不平等体制」について、地域の労働市場の競争力、産業における雇用の基準等を調査した。
 - 分析の結果、公民権運動やフェミニズムなどの社会運動の活発化によって、職業分離が解消されることが示された。
 - ◇ 公民権運動が隆盛した1960年代初頭において、職場における人種統合が急速に進んだが、1970年代以降の運動の衰退とともに人種統合は停滞化した。一方1970年代以降にフェミニズム運動が活発化し、職場における男女の統合が進み始めた。1990年代になると、男女統合も人種統合も失速し、白人男性の特権が再び増大した。
 - また、女性や有色人種の進出が著しい組織や産業であっても、権威的立場は白人男性によって占領されていることが示された。さらに、多くの産業や組織では人種再分化が進んでおり、特に白人女性と黒人女性の分離が進んでいる。研究終了時点の2005年においても、米国の労働力は高度に分離されている。

(4)ジェンダーギャップは、実はマザーフッドギャップなのか? (122-124)

- フェミニストの定量的研究者たちは、米国における所得の男女差は、女性と男性の差というよりも、「母親とその他の人」の差であることを立証し始めている。
 - Shelley J. Correllら (2007) は、雇用主が母親を差別しているという仮説を立てた。
 - 彼らはその仮説を検証するために、192人の大学生(男性84人、女性108人)に、子供の有無以外はすべて同等である2組の就職希望者を評価させる実験を計画した。
 - 研究者たちは、「母性ペナルティ」と呼ぶべき強力な証拠を発見した。研究参加者たちは、あらゆる指標で母親を著しく低く評価したのだ。一方、父親については、親でない男性よりも高く評価された。

³ ここでの「逆差別」とは、女性や黒人を優遇した結果、白人男性が最も不利益を被り、黒人女性が二重に優遇される状態を指す。

(5)国による政策が平等を遠ざけるのか？ (124-125)

- Lynn Prince Cooke (2011) は、長年にわたって平等性を高めるために実施された政策的努力を踏まえて、彼女が「ジェンダー・クラスの不平等[gender-class inequality]」と呼ぶものが、所得や有給・無給の労働分担においてなぜ存続しているのかを問うている。
 - Cooke は、社会政策の違いがジェンダーや階級に与える影響を調べるために、経済的不平等やジェンダー不平等、政府の経済介入の度合いが異なる 6 つの国 (東ドイツ、西ドイツ、スペイン、オーストラリア、イギリス、アメリカ) を調査した。
 - 分析の結果、ある集団を平等にするための改革が、他の集団間の不平等を増大させるという意図せざる結果を招くこともあることが明らかになった。この結果は、平等の実現のためには、複数の制約の相互作用を注意深く考慮する必要があることを示している。

4. 定量的研究におけるフェミニストの戦略 (125-140)

■フェミニスト研究者はどのような問いを立てているのか？ (125-131)

- フェミニスト研究者は、特に質問の種類、尺度へのアプローチ、分析の整理の仕方において、特徴的な方法論を開発している。
- Jill Williams (2010) は、人口統計学者に対して、ジェンダーを独立変数として扱うのではなく、それを従属変数とすることで、権力を差別的に配分する社会的プロセスを明らかにすることを提言している。
 - Williams は 4 つの戦略を示している。第 1 に、男女間の二項対立の自明性を疑うこと。第 2 に、社会的相互作用の過程で不平等がどのように生み出されるかを明らかにすること。第 3 に、制度化された組織的実践がどのように不平等を生み出すかを明らかにすること。第 4 に、特定の政治的闘争のために必要な分析を提供することである。

■どのような尺度を使っているのか？ (131-136)

- 定量的手法を用いるフェミニストは、しばしば標準的な尺度を用いる。一方で、フェミニストが革新的な尺度を用いた例は数多く存在する。
- フェミニスト研究者は、標準的な定量的尺度がジェンダー・ブラインドネスであることを明らかにしてきた。
 - 例えば経済学者は長い間、労働組織を分析する際に分業と労働市場という概念を使用してきたが、分業と労働市場の両方が性別によってどの程度組織化されているかについては無頓着であった。

- ・ フェミニストたちは、職業や産業における労働者のうちの女性割合を考慮することによって、ジェンダー間の職務分離を測定する手法を追加した⁴。
- ・ フェミニスト研究者たちは、社会組織における一見中立的な慣行が、いかにして体系的なジェンダー不平等を生み出すのかについて、定量的手法を用いて明らかにしてきた。
 - ・ 例えば、Paula England ら (1996) は、仕事のスキルを測定する標準的なアプローチを批判した。彼女たちは、標準的なアプローチが認知スキルと身体スキルを考慮する一方で、社会的スキル (対人コミュニケーション、他者に対するサポート) を考慮しないことを指摘し、社会的スキルを測定するための新たな尺度を開発した。

■分析結果はどのように整理されているか? (136-140)

- ・ 筆者が調査したフェミニスト研究者たちは、統計モデルを特定するために様々なアプローチを採用している。
 - ・ 例えば、性別をコントロールしたモデルとそうでないモデルを比較すること、社会的に異なるグループ間 (人種、階級、性別など) で比較すること、そして社会的文脈の因果的影響について統計的検定を行うことなどが挙げられる。

5. 結論 (140-143)

- ・ フェミニスト的な定量的研究は、以下の4つを達成している。
 - ・ 女性やその他の不利な立場にある人々の日常生活に共通する制約や経験から出発し、定量的研究における代替的なアプローチを開発している。
 - ・ 特権と権力を考慮に入れて、尺度を開発している。
 - ・ 論文の文献レビューにおいて、定量的研究と、フェミニスト的研究や定性的研究とを積極的に統合しながら、戦略的に多様な言説を維持している。
 - ・ 社会的に不利な立場にある人々に力を与える知識を創造している。

⁴ ジェンダー間の職務分離は、水平的分離と垂直的分離が存在する。まず水平的分離は、ジェンダーによる偏った職業・職務配分状況をさしている。たとえば、看護師や保健婦、助産婦、栄養士は女性に偏り、医師は男性に偏っているという例に見られるように、いわゆる「女性職」「男性職」という分離をとらえようとするレベルである。こうした区分においては、医師と看護師の例から明らかなように、男性の方が概して高いステータスの職業・職務に属することが多い。だが、そればかりとは限らず、「女性職」の学校給食婦、「男性職」の廃棄物処理労働者のなどの例に見るように、必ずしも上下関係がそこに入りこんでいない場合もある。もう一つは垂直的分離であり、これは同一職種の中なかでも専門的知識や技能的知識や管理能力が必要でありかつ社会的ステータスが高い職務に男性が、判断責任や専門知識・技能を必要としない定型的な下位のステータスに位置づく職務に女性が割り当てられることをさしている。たとえば、教師でみても、初等教育に女性、中等教育以上の教職に男性が多数集中し、管理職も圧倒的に男性が占めている (木本 2003: 32)。

【参考文献】（Sprague（2016）に未記載の文献を挙げる。）

木本喜美子，2003，『女性労働とマネジメント』勁草書房。

野村康，2017，『社会科学の考え方』名古屋大学出版会。